戦中期「講談社の絵本」

平成 20 年 10 月 26 日

講師：吉田　新一

【はじめに】

私が子どものときに親しんだ絵本といえば、覚えているのは講談社の絵本ばかりです。幼稚園へは行かなかったので、「キンダーブック」は知りませんでした。「コドモノクニ」も「子供之友」も与えられた記憶がありません。また、講談社の絵本と言っても、現在その 203 冊を見ると、4 分の 1 を占める＜漫画＞には全くなじみがありませんし、5 分の 1 を占める（『支那事変 大手柄絵話』や『忠勇感激美談』といった）戦意高揚の時局ものにも、記憶がありません。父は私と似た職業人で仏像研究など国史家でしたから、『國史絵話』（昭和 13（1938）年 8 月、Y2-N03-H187（国立国会図書館請求番号　以下同じ））、『日本よい國』（昭和 13（1938）年 7 月、Y2-N03-H185）、『皇紀二千六百年奉祝記念國史絵巻』（昭和 15（1940）年 2 月、Y2-N03-H193）の 3 冊は、絵のどれもあざやかに思い出すことができます。従って、講談社の絵本が懐かしいと言っても、私の場合は特定のものに限られていますが、幸か不幸か、多くの同時代の人たちが回顧している＜これで軍国少年に育てられた＞という思いは、少なくとも私の意識にはありません。

こんにち講談社の絵本を評価する際に、軍国主義全盛期に資本力を駆使して宣伝し大量出版した、その影響を抜きには考えられないという意見、また、5 年半で 203 冊も出版した、その全体を＜叢書＞として一括捉えた上でなければ、個々の作品は考えられないという意見、いずれもまっとうで反論の余地はありませんが、にもかかわらず敢えて、私はこれからいくつかの個別作品を取り上げて評価してみようと思います。数は限られていても、時代の流れに必ずしも流されずに出来上がったものに、私は注目しているからです。平成 17 年度国際子ども図書館・児童文学連続講座「日本児童文学の流れ」の中で、私は＜十五年戦争期の絵本―My Choices＞を語りました。戦中期にもかかわらず良心的な絵本が出版されていたことを、具体的に挙げて紹介しました。その頃から、日本の近代絵本は、戦中期から戦後約 10 年間、ユニークで実り豊かな時期にあったのではないかという思いを抱くようになりました。そして、戦中期の講談社の絵本も、併せて見直してみようと思っています。単刀直入に言いますと、戦中期の講談社の絵本は、日本的な素材を意図的に取り上げ、また、文学的にドラマチックなストーリーを積極的に絵本化する試みをしていました。そのことをこれからお話ししてみようと思います。

国際子ども図書館ではただいま「童画の世界――絵雑誌とその画家たち」という企画展の開催中です。本日の私の話もそれに合わせた企画ですから、最初に絵雑誌の童画家とのつながりを、少し

話しさせていただきます。大正から昭和初期へかけて、代表的な絵雑誌『子供之友』（大正３（1914）～昭和 18（1943）年　Z32-B156）、『赤い鳥』（大正７（1918）年～昭和４（1929）年　Z32-B339）、『金の船（金の星）』（大正８（1919）～昭和４（1929）年　Z32-B88）、『童話』（大正９（1920）年～大正 15（1926）年　Z32-B311）、『コドモノクニ』（大正 11（1922）～昭和 19（1944）年　Z32-B158）などが出てきて、岡本帰一、清水良雄、川上四郎、武井武雄、村山知義、初山滋、本田庄太郎、河目悌二などの、いわゆる童画家が活躍し始めました。講談社の絵本は絵雑誌と対比して、１冊１テーマを軸にしているのが特色で、物語絵本には、童画家以外の挿絵画家、そして日本画や洋画のタブロー画家にもイラストレーションを依頼していました。その中で、童画家がかかわった注目すべき作品では、川上四郎が単独でイラストした『童謡畫集』（昭和 12（1937）年 6 月 1 日刊、Y8-N03-H802）が挙げられます。10 場面程を選んでご覧いただくと、表紙、内扉、クツガ　ナル（清水カツラ（作詞者、以下同じ））、ユフヤケコヤケ（中村雨紅）、アメフリ（北原白秋）、アノマチコノマチ（野口雨情）、マリト　トノサマ（西条八十）、オ山ノオサル（鹿島鳴秋）、てるてる坊主（浅原鏡村）、ヒライタ　ヒライタ（昔の童謡）などで、童画の世界が楽しめます。これと姉妹編である『童謡畫集と繪手本』（昭和 13（1938）年４月５日刊、Y8-N03-H801）では、18 名の童画家が参加しています。同じく 10 場面程を選んでご覧頂きましょう。（括弧内は作詩者、画家名の順）。表紙、ウサギ　ノ　ダンス（野口雨情、河目悌二）、タコ　ノ　ウタ（文部省小学唱歌、本田庄太郎）、カナリヤ（西条八十、川上四郎）、ユフヒ（葛原しげる、本田庄太郎）、シカラレテ（清水かつら、加藤まさを）、カゴメ　カゴメ（昔ノ童謡、河目悌二）、アメフリ　オツキ（野口雨情、川上四郎）、アカイ　バウシ　シロイ　バウシ（武内俊子、河目悌二）、カヘロ　カヘロ（北原白秋、黒崎義介）、多彩な童画家の世界の一端が楽しめますね。

他に、本田庄太郎による『こがね丸:名作童話』（昭和 13（1938）年６月 10 日刊、Y17-N03-H1004）、『孫悟空』（昭和 14（1939）年１月 10 日刊、Y18-N03-H487）、『孫悟空と八戒』（昭和 15（1940）年６月５日刊、Y18-N03-H488）などもあります。また、講談社の絵本は１冊１話の建前ですが、多くは巻末に特別読み物と称して、複数の短編の物語が併載されており、その挿絵にも多くの童画家が参加していて、黒崎義介などいわゆる第二世代の童画家の名を挙げることができます。

●『大江山』（昭和 14（1939）年７月１日刊、松村武雄・文／米内穂豊・絵、Y17-N03-H951）

私が子どもの頃、大好きだった物語絵本です。大将の源頼光が、大江山の鬼、酒呑童子を退治する話です。「京都ノ羅生門ニ　マイバン　オニガデテ　ヲンナコドモヤ　タカラモノヲ　ウバッテ　イクトイフ　ウワサガ　タチマシタ」と語りはじめられます。ある晩、身分の高い姫がさらわれて、

源頼光は家来の渡邊綱に鬼退治を命じます。綱は羅生門へ行き、鬼の茨木童子と出くわし、その腕を切り取って帰ります。が、彼の乳母だったという老婆が訪ねてきて、鬼の腕を見せろと言う。断わると育ての恩を忘れたかと強いるので、しぶしぶ見せると、たちまち老婆は腕を奪って姿を消します。鬼の騒ぎはその後もつづき、今度は頼光に、鬼退治の勅命が下ります。頼光は家来の四天王らを連れて、山伏姿で大江山へ酒呑童子退治に出かけます。途中で、不思議な老人から、人には妙薬で、鬼には毒、という酒を授かり、さらに奥へ進むと、川で洗濯している女に会い、彼女の道案内で鬼が城に着きます。頼光らは、道に迷った山伏と偽って、城内に入り、神便鬼毒酒をふるまって鬼どもを酔いつぶし、頭の酒呑童子や鬼たちをすべて討ちとって、捕らえられていた女たちを解放し、都へ凱旋するのでした。この物語は、室町から江戸初期の時代の説話集『御伽草子』（岩波文庫、上下）に「酒呑童子」という題で語られている＜頼光伝説＞によるものですが、渡邊綱が茨木童子の腕を切り取ったのに、奪い返されるという話は、そこでは出てきません。同じ頃の『羅生門』という 2 巻本絵巻（『奈良絵本（上)』工藤早弓・編　京都書院, 1997.12　京都書院アーツコレクション; 71　KC16-G1352）に、それは語られています。絵巻第 1 巻で、頼光は勅命で大江山の鬼を退治します。が、鬼の残党が羅生門で悪さをするので、渡邊綱が名剣膝切丸で鬼の腕を切り落としますが、すぐにそれは奪い返されてしまいます。絵巻第 2 巻では、頼光が病に倒れます。占い師が宇多の森の牛鬼を退治すれば治ると言い、渡邊綱が牛鬼を攻め、腕を切り落とします。頼光の病は治りますが、鬼の腕は 7 日間、仁王経を読んで厳重に護らなければなりません。が、6 日目に、牛鬼が綱の母の姿に化けてやってきて、腕を取り返そうとします。綱は正体を見破って、牛鬼を討ち取ります。これで明らかなように、奈良絵本の『羅生門』も、＜頼光伝説＞を語っています。

この「酒呑童子」と「羅生門」の 2 話は、近代に入って「大江山」と「羅生門」というタイトルで、それぞれ独立の話として、明治 28（1895）年に巌谷小波によって、彼の『日本昔噺』叢書 24 冊の中に、再話されました　（『日本昔噺』巌谷小波[他]　平凡社, 2001.8.　東洋文庫 692 KH231-G463)。しかし、講談社絵本では、松村武雄によって、二つの話は一つにまとめられて語られています。渡邊綱が羅生門で鬼の茨木童子の腕を切り落とし、それが奪い返される話が、まず語られて、次に鬼騒動がエスカレートして、今度は頼光らが酒呑童子討伐に出かける話になっています。こうして＜頼光伝説＞は、連続性のある、読み応えのある話として、ここに再話されたことになります。

●『金太郎』(昭和 12（1937）年 3 月 1 日刊、〔千葉省三・文〕／〔米内穂豊・絵〕、Y17-N03-H1001)

講談社の絵本では、もう一つ『金太郎』があります。語り手は、松村武雄でなく、千葉省三です

が、これも＜頼光伝説＞の話です。絵本の前半では、足柄山で「マサカリ　カツイデ　キンタラウクマニ　マタガリ　オウマノ　ケイコ　ハイシイ　ドウドウ　ハイ　ドウドウ…アシガラヤマノヤマオクデ　ケダモノ　アツメテ　スマフノ　ケイコ　ハッケ　ヨイヨイ　ノコッタ」と童謡に歌われている＜金太郎＞像が、歌のとおりに語られていて、その後に、怪力の金太郎を、源頼光が見付けて惚れこみ、名を坂田金時と改めさせて、家来とします。そして、金時は鈴鹿峠の鬼征伐を志願して、一人で頭の鬼を生け捕るという手柄をたてて、＜頼光の四天王＞に引き立てられるまでが語られています。ここでは、金太郎が坂田金時となってからの部分が、絵本全体の３分の２を占めていますから、この＜金太郎話＞は＜頼光伝説＞として語られていると言ってよいでしょう。巻末には、再話者千葉省三による＜頼光伝説＞にまつわる雑話も載っています。四天王については、「坂田金時は、渡辺綱、碓井貞光、卜部季武と共に、源頼光の四天王といわれました。大勢の家来がある中で、四人の偉い家来だった譯です。この四人は日本で四天王と言われた人物の中で最も古い方で、その後段々と四天王が多くなりました。源平時代には源義経の四天王が有名ですが、木曽義仲にも四天王があります。その後に新田義貞の四天王、戦国時代には川中島の合戦で名高い上杉謙信と武田信玄、雙方に四天王が、がんばってゐました。織田信長…豊臣秀頼…徳川家康の四天王、何れも史上で有名です」（このように、子ども読者に＜ためになる知識＞を積極的に添えるのが、講談社絵本の一特色でした）　。

＜金太郎＞話は、先に挙げた巌谷小波の『日本昔噺』にも再話されていますが、講談社版で頼光自身が金太郎を見付けだしているのに対して、小波の再話では、碓井貞光が樵夫姿でもって「末頼もしい豪傑を探し」に出て、金太郎を見付けて、頼光に紹介しています。小波は、金太郎の足柄山での話を主に語っていて、その後日談として、最後に次のように書いています。「樵夫の貞光は、此の足柄山におきまして、図らずも金太郎という、豪傑の卵子を拾ひまして、自分も大きに喜び、すぐと此児を連れまして、はるばる都へ帰って参り、この児を頼光様の御目にかけて、右の訳を申上げますと、頼光様も殊の外のお喜悦で、そのまま御家来になさいまして、種々の御褒美を賜はりました。後に四天王の一人に成て、大江山で鬼を退治たり、蜘塚の土蜘蛛を討取た坂田の金時という豪傑は、即ちこの金太郎であります。なんと豪気なお話ではありませんか！」と。これを千葉省三の再話と比べて、省三の方がはるかに物語性に富んで、読み応えのある話になっています。

いずれにしても「酒呑童子」話は、＜伝説＞です。「むかしむかし　あるところに　おじいさんとおばあさんが　いました」と始まる、不特定設定で語られる＜昔話＞と違って、＜伝説＞は特定の時、所、人の話です。何時、何処で、誰が――これが＜伝説＞と＜昔話＞の違う点でしょう。すなわち、＜伝説＞では固有名詞が大切なのです。とは言え、子どもを対象とした絵本の場合には、固

有名詞にあまりこだわりすぎない配慮も、また必要でしょう。その点、松村武雄のテキストには、学ぶべきところがあるように思います。例えば『大江山』は、「ムカシ　京都ノ羅生門ニ…」と始まり、「アルバン　トウトウ　ミブンノタカイ　ヒトリノ　オヒメサマガ　サラハレマシタ」と続きます。息女を奪われた池田中納言国賢卿（クニタカ）への言及は避けて、「ミブンノタカイ　ヒトリノ　オヒメサマ」とされています。また、頼光が酒呑童子征伐に連れていった家来は、四天王ともう一人藤原保昌がいましたが、これを「頼光ハ渡邊綱ヤ坂田金時ナド五人ノツヨイケライヲツレテ…」としています。家来の固有名詞を二人にとどめて、「…ナド五人のツヨイケライ」としています。

参考に挙げると、昭和54（1979）年に＜曼殊院蔵の絵巻『酒呑童子』3巻＞を使って『しゅてんどうじ』絵本が、某社から出ました。そのテキストは、「むかしむかし、みやこで　つぎつぎと　ひめぎみが　さらわれることがあった。うつくしい　むすめを　さらわれて、どのおやも　なげき　かなしみ…」とはじまり、「おにたいじのためにと　源頼光という　さむらいがえらばれた。らいこうは、五にんの　さむらいを　よびあつめ…」とつづいていきます。再話者は解説文で「この絵本では、娘をさらわれた＜いけだの國賢＞も、占師の＜（安部）清明＞も、さむらいたちの＜四天王と保昌＞も、固有名詞をすっかりはぶいてしまった」と述べて、頼光と酒呑童子以外は、固有名詞が全く省かれています。一つの見識かもしれませんが、＜伝説＞の魅力は、誇張があったり、フィクション化があったりでも、実話から始まった話で、そこが＜伝説＞の伝説たるゆえんであり、魅力でもあります。固有名詞は、伝説の＜話＞としての信憑性（リアリティ）を支えているので、たとえ子ども向けの絵本でも、これを「すっかりはぶいてしま」うのには、少なくとも私は抵抗を覚えます。「むかしむかし、みやこで…」と始めないで、「ムカシ　京都ノ羅生門に…」と始めるところに、「酒呑童子」話の面白さの核があると思います。

千葉省三の巻末解説に戻って、源頼光についてはこう書かれています。彼は「今から千年程昔に生まれ、その頃、日本国中で一番強い大将でした。その頃の武士は中々御殿に上ることが出来なかったのですが、頼光は数々の働きをして正四位の下を賜わり御殿に上ることを許されました。頼光には色々と武勇のお話が傳はってゐます。その頃、鬼同丸という力の強い賊が居りましたが、頼光を殺そうと、野牛の皮をかぶって近づき、いきなり躍りかかって、きり込みましたが、頼光ほどの大将にはすきがありません。却って、一刀のもとに鬼同丸を斬りたふしてしまいました。頼光が天皇の御命令で、丹後の國大江山に棲む山賊の大将、酒顛童子を討ったお話は、頼光のお話の中で一番有名です」。これも子ども読者にとり、絵本の適切な解説と言えるでしょう。

以上は酒呑童子の舞台が、丹波の大江山で語られていましたが、実は滋賀県の伊吹山を舞台にした系統の話もあり、この＜伝説＞には、資料も多く、調べだすと興味がつきません。詳しく知りた

いむきは、福音館書店の『子どもの館』誌（1975 年 7 月～1976 年 10 月号　Z13-1277（東京本館所蔵））に連載されて、後に平凡社選書（1977.10）と岩波書店の同時代ライブラリー（1992.3）に収められた、故佐竹昭広氏の『酒呑童子異聞』を参照されることをお勧めします。

少年の頃の私は、『大江山』の（米内穂豊の）絵が、話のおどろおどろしさを、巧みに描き出していたからでしょう、ひじょうに印象が強かった思い出があります。例えば、最初の見開きページで、「アルバン　トウトウミブンノタカイ　ヒトリノ　オヒメサマガ　サラワレマシタ」という文の絵では、お姫さまが籠からさらわれた直後の瞬間が描かれていて、天から稲妻が走り、烏帽子姿の従者も、駕籠かきも、簾のめくりあがった駕籠を置き離して、耳ふさぎ惑っている姿が、印象に強く残っています。この絵本ではそういった話の中の山場が、子どもの目に強く訴える絵と共に語られています。

渡邊綱が羅生門の鬼退治に出かけた 2 場面――第 3 と第 4 の見開き――では、綱が「金札」と書いた札を持っています。待っても鬼が出てこないので、「キタシルシノ　フダヲタテテ　カヘラウト」すると、不意に茨木童子が出てきます、そこでは金札が、すでに綱の後ろに立てられています。＜金札＞という立て札ですが、『岩波古語辞典』をひくと、＜鉄札＞の対とあり、「閻魔の庁で、浄玻璃の鏡にかけて亡者の善悪を見分け、善人の名を記して極楽に送るという黄金の札」とあります。（「鉄札」の方は「浄玻璃の鏡に掛けて見分けた悪人の名や罪業を記して地獄に送るという札」。）また、『辞典』には、金札の用例として、「金札を引替へにする鬼の腕」（雑俳・忍び笠）が挙げられています。この用例は、まさに穂豊が描く＜綱と茨木童子＞の場面を暗示しています。おそらく奈良絵本（絵巻物）に、そのイメージの元があったのではないでしょうか。

中世小説研究の権威で、岩波文庫『御伽草子』の校注者でもある市古貞次氏によると、「御伽草子」という呼称は、室町時代の物語草子の汎称で、その内容は、①公家物、②僧侶の物語と（神仏の本縁、社寺の由緒を説いた）本地物、③武人伝説物、④庶民的小説、に大別されるといいます。その内の＜武人伝説物＞で、特に名高いのが、先に見た＜頼光伝説＞と、これから見る＜源義經（および武蔵坊辯慶）伝説＞で、講談社絵本では、それが『牛若丸』、『辯慶と義經』、『静御前』の 3 冊で語られています。

●『牛若丸』(昭和 12（1937）年 2 月 1 日刊、〔大倉桃郎・文〕／〔近藤紫雲・絵〕、Y17-N03-H999)

＜義經伝説＞というと先ず、京都の鞍馬山で天狗に武術を習い、五条の橋で辯慶と出会う＜牛若丸伝説＞が有名でしょう。その牛若丸が、元服で名を源九郎義經と改めて、奥州は平泉の藤原秀衡（ヒデヒラ）の元へ行って、源氏の宿敵平家を討伐する時をうかがう、そこまでを＜義經伝説＞の第一幕とすると、

それが絵本『牛若丸』に語られています。牛若丸の父源義朝は平治の乱（1159）で平清盛に敗れます。絵本では、赤ん坊の牛若を胸に抱く母常盤御前の元へ、父義朝の死の報が届くところから始まります。常盤御前は牛若の兄、今若、乙若と一緒に、雪深い道を京都からいったんは逃れますが、子どもたちの命を守るため、京都へ戻って、3 人の子をそれぞれお寺に預けます。牛若丸は、鞍馬山の東光坊の元で僧侶となる修業を始めます。が、11 歳のとき、自分が源氏の大将の子であり、父が清盛に殺された、ということを知って、密かに平家打倒を決意します。それからは、夜にこっそりと一人で剣術を稽古しますが、大天狗がその熱意を垣間見て、彼に剣の秘伝を教えます。

辯慶は京都五条の橋で牛若丸と出会い、そのあまりの強さに圧倒されて、家来となります。また牛若丸は、大金持ち＜金売の吉次＞と知り合って、商用で陸奥へ行く吉次に同行して、源氏の味方である平泉の藤原秀衡のところへ行くことになります。途中、近江の鏡の宿で、吉次の金品をねらう大盗賊熊坂長範と由利太郎の襲撃を受けますが、牛若丸が剣で、彼らを討ち取ります。また、尾張の国の熱田神宮では、16 歳となって元服式をおこない、源九郎義經と名を改めます。さらに上野（コウズケ）の国（群馬県）の板鼻の里で、たまたま泊めてもらった家が、父義朝のかつての家臣伊勢三郎の居宅だったことから、伊勢三郎もまた家来となって同行します。こうして、平泉の藤原秀衡の元へ来て、平家討伐の期を待ちます。その間、兵書を学び、弓矢、乗馬の訓練に励み、やがて 24 歳を迎えたとき、兄源頼朝が相模の国で平家に対し兵を起こしたと聞いて、直ちに伊勢三郎、武蔵坊辯慶、佐藤嗣信、忠信らを連れて鎌倉へ急ぎ、父の死で伊豆の国に流されていた頼朝と感激の再会を果たして、平家討伐が開始されます。以上が絵本『牛若丸』の内容です。

この絵本でも、テキストを書いた大倉桃郎が巻末で、＜金売の吉次＞について、「本名を橘次季春（キツジスエハル）（一説に吉次信高）と言って、京都三条に住んでゐた大金持です。吉次は、奥州で採れた砂金を京都に持ってきて、それで都の珍しい品物を買い集め、それを奥州に売りに行く商売をしてゐました。藤原秀衡の所にも出入りしてゐたので、牛若丸を秀衡の處へ案内したのです。牛若丸に会って、その非凡なる人物を見抜き、心から尊敬し、商売を止めて、牛若丸の家来になったのです。義經が平家と合戦をした時、家来の中に堀弥太郎景光という、弁舌の上手な、交渉事の巧みな武士がゐました。この堀弥太郎こそ、実は改名した金売吉次でした。かうして吉次は、義經の大事な家来の一人として、永く忠義をはげみました」と解説しています。

●『辯慶と義經』（昭和 15（1940）年 7 月 1 日刊、〔八波則吉・文〕／〔米内穂豊・絵〕、Y17-N03-H1068）

次に、絵本『辯慶と義經』では、義經の平家討伐の手柄が描かれ、また、不遇な後半生が語られます。話はまず、辯慶が五条の橋で牛若丸と出会い、家来となり、牛若丸が名を義經と改めて奥州

藤原秀衡の元へ行き、頼朝挙兵の報を聞くと、鎌倉へ馳せ参じるところまでが概略語られて、それから頼朝の意を受けて義經が一の谷で平家を攻めるところから、メインストーリーが始まります。義經は敵を裏から奇襲しようとしますが、道が解らず、辯慶が鷲尾三郎という若者を見つけて案内させます。そして、険しい鵯越（ヒヨドリゴエ）を一気に駆け下って、平家を敗走させます。逃げる平家を船で、四国の屋島へ追い、壇ノ浦でついに壊滅させます。義經は勇んで京都へ帰りますが、なぜか兄頼朝は義經に会おうとしません。堀川の屋敷で辯慶と寂しい日を送っていると突然、頼朝の命で土佐坊が襲ってきます。辯慶は土佐坊を生け捕りますが、頼朝の怒りはつのり、義經は辯慶と船で九州へ逃れようとします。が、途中で台嵐に遭い、大物浦（ダイモツノウラ）（兵庫県）へ漂着し、そこから吉野へ逃避行を始めます。頼朝の追跡は執拗で、吉野へ行くと、荒法師たちが行く手を阻みます。辯慶の機転で逃れはしましたが、身の危険が迫ってきたので、山伏姿に変装、奥州へ落ちのびることになります。途中、安宅の関で疑われると、辯慶は勧進帳を読み、荷物持ちの強力に変装した義經を厳しく殴打して、関所を通過して、ようやく秀衡の元へ着きます。が、秀衡はじきに亡くなってしまい、子の泰衡が頼朝の圧力に屈して、義經を奇襲することになります。絵本の最後ページで、「テキハ　義經ノヤシキニ　ヒヲ　ツケマシタ。ミカタハ　ミンナハナバナシク　ウチジニシテシマイマシタ。（義經ハ　辯慶タダヒトリヲ　ツレテ　トホイ　エゾノクニヘ　ノガレタトイフ　イヒツタヘモアリマス。）」と結ばれています。（が、事実は、義經も辯慶も衣川の館で自害して果てたと言われています。）ここで、「判官贔屓」ということばについて。平家を滅ぼして京都へ帰った義經は、後白河上皇の下で、頼朝の許可を得ず検非違使（ケビイシ）（京都警備の役人、今日の警察官と裁判官を兼ねた、力の強い役人）となりました。そのことが（他にも理由はあったようですが）、特に頼朝の怒りをかい、義經の悲運が始まりました。「＜判官義經＞のような不遇の者に、世間は同情し、贔屓する」これを「判官贔屓」と言いますが、この＜判官＞すなわち義經です。

●『静御前』（昭和 14（1939）年 5 月 5 日刊、西条八十・文／近藤紫雲・絵、Y3-N03-H121）

＜義經伝説＞のもう一つに、義經の妻である静御前の話があります。『静御前』が、それを語ります。「静ハ　京都ノヰナカ　ノ　北白川　トイフ　トコロデ　ウマレマシタ。オトウサンハ　平家ノタイショウ　平清盛ニコロサレ　オカアサンノ　磯禅師トフタリデ　サビシク　クラシテヰマシタ。磯禅師ハマヒノ　センセイデシタノデ　チヒサイトキカラ　静ニ　マヒヲオシヘマシタ。静ハカシコイ　ムスメデヨクオボエマシタ」と語り始められています。磯禅師はいわゆる＜白拍子＞です。静が 13 歳のとき、平家討伐のため義經が京都へ来ましたので、群衆に混じって、静親子は「ウツクシイ　コウバイノ　エダヲ　義經ニ　ササゲ」て歓迎しました。ところで、京都で 3 ヶ月も雨が降

らず、後白河法皇は神泉苑で、雨乞いの舞を催しましたが、降雨の気配はありません。改めて、舞の上手な娘を求めて、静が登場します。静が舞うと、たちまち雨が降りだしました。

「義經ハ　京都ヲマモル　ヤクメニ　ツイテヰマシタガ、静ノ　マイノ　ジョウズナコトヲキイテ　静ヲ　ジブンノ　ヤシキヘ　マネキマシタ。ソシテ　ハハノ磯禅師ト　イッショニキタ　静ヲヨクミルト　イツカ　ミヤコイリノトキコウバイノ　エダヲ　オクッテクレタ　ムスメナノデ　義經ハ　ナホサラ　ヨロコビマシタ。ソレガ　エントナッテ　ヤガテ　静ハ　義經ノ　ツマトナリ　静御前ト　ヨバレルコトニナリマシタ」。

義經と静御前はしばらく京都の六条、堀川の屋敷で過ごしていましたが、義經は須磨の一の谷にたてこもる平家を討つために出陣して、逃げる平家を屋島に追い、ついに壇ノ浦で全滅させました。しかし、兄頼朝は、義經が「アマリ　テガラヲタテルノデ　ジブンヨリモ　エラクナッテシマウカモシレナイト　オソレマシタ。ソコデ義經ヲ　コロスタメニ」土佐坊昌俊を送りました。これを義經が殺したので、頼朝の怒りはつのって、軍を駿河へ進めてきました。義經は「アアキョウダイドウシガ　アラソウトハ　ナントイフ　ナサケナイコトカ」と嘆いて、しばらく九州へ逃れていようと、摂津の国の大物浦（ダイモツノウラ）から船を出しました。しかし、台風に遭って、義經と静御前とわずかな家来を乗せた船だけが、摂津の国の住吉浦（スミヨシノウラ）に漂着し、一行は吉野山へ行って、隠れようとします。

「チャウド　十二月ノ　ナカバデ　吉野山ニハユキガフッテヰマシタ」。しかも、山では寺の坊主たちが、頼朝の言いつけで義經を捕まえようとしていました。「義經ハ静御前ニムカヒ＜オマヘハヲンナダカラ　京都ヘモドッテ　カクレテヰルガヨイ＞トサトシテ　ナキシズム静御前ト　ワカレマシタ」。静御前は雪の山道を迷い、一日一晩歩いた末に、蔵王権現堂に着いたので、義經のために祈願します。それを知った坊主たちは、義經の行方を彼女に厳しく問いますが、静は口を割りません。とうとう「ヒトリ　トシトッタ　シンセツナヒトガ＜シラナイモノヲ　セメテモ　シカタガナイデハナイカ＞トイッテ」静御前を京都へ送ってくれました。静が京都へ戻ったと聞くと、頼朝は静御前母子を鎌倉へ呼んで、義經の行方を厳しくたずねますが、静はここでも口を割りませんでした。

ちょうど鶴岡八幡宮の春祭りで、頼朝の妻政子は、うわさの高い静御前の舞を一度見たいと思って、舞を奉納するよう静御前に求めました。静は気が進みませんでしたが、一生懸命舞ったら神様が頼朝と義經の仲直りを助けてくださるに違いない、と思い直して、舞います。彼女は「シズヤシズ　シズノオダマキ　クリカヘシ　ムカシヲイマニ　ナスヨシモガナ」と謡いながら舞いました。「義經トイッショニ　クラシテヰタコロハ　タノシカッタガ　イマハ　サビシイ　ミノウヘデアルトイフ　ジブンノココロヲ　ウタッタモノデス」。見物の者は皆、その舞をほめましたが、頼朝だけ

は機嫌を損ねました。が、政子のとりなしで、褒美が与えられました。静御前と母は「京都ノイヘニ　カヘリマシタ。ソシテ　ソレカラハ　マイニチ　義經ノ　ブジヲ　イノリナガラ　イッショウヲ　オクリマシタ」と、絵本では結ばれています。

静御前は鶴岡八幡宮でもう一曲、「吉野山みねの白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ恋しき」という唄も舞っていました。静御前のその後の消息は不明ですが、一説に出家したという話が残っています。

ところで、大正末から昭和へかけて講談社の『少年倶楽部』誌で活躍して、同誌に連載の吉川英治作「神州天馬侠」の挿絵で知られる山口将吉郎が描く、幻の『源義経』が講談社の絵本にはあったと言われています。その間の事情を、将吉郎ご本人が晩年に語っています。「『少年倶楽部』編集長をやめた加藤謙一さんが、講談社の絵本の創刊に着手されたときですが、＜幼い子どもに理解できて、しかも故実にも正確な源義経を、絵本で描いてもらいたい＞とおっしゃる。そう言われると、いいかげんなところで描くのは良心が許さないから、本物の鎧をこしらえたり、弓の射方を習いに行ったり、下準備しているうちに五、六年が過ぎて、とうとう時機を逸してしまった。もっとも、このとき調べた自信があるから、戦後の『風雲児源義経』に力が発揮できたわけで、損をしたとは思いませんな。…昭和三〇年頃、ある子ども雑誌に連載の沙羅双樹『風雲児源義経』の挿絵は、わたしの絵のもっとも完成したときの作品だと思っております」（上笙一郎編『聞き書 日本児童出版美術史』より）

●『源為朝』（昭和 12（1937）年 9 月 1 日刊、北村壽夫・文／米内穂豊・絵、Y3-N03-H118）

以上で＜伝説絵本＞を 4 冊見てきましたが、もう 1 冊『源為朝』を挙げてみたいと思います。

時代は義經以前で、鎌倉時代の『保元物語』に源為朝（1139~1177） が非現実的な英雄像で語られています。絵本では、「為朝ハ　源氏の大シャウ為義の子で　小サイトキカラ　弓ノメイジンデシタ」と始められています。13 歳のときに、2 人の武士が放つ矢を次々素手で受け止めてみせて、人々を驚かせます。あまりの強さで彼をねたむ人がいるので、父は為朝を九州へ送ることにします。九州では、大将尾張權守季遠（オワリゴンノカミスエトホ）の元でしばらくは、戦の本を学んだり、山へ狩りに出かけたりしていました。

ある時、飛びかかってきた大イノシシを一矢で倒して、人々を驚かせました。また、逃げるシカを追って山奥へ入って、2 匹オオカミが倒れたシカを奪い合っているのに出会うと、シカを 2 等分してオオカミの争いをやめさせました。オオカミは為朝の優しい心に感じて離れなくなり、為朝は 2 匹を山風、野風と名づけて、家来にしました。

また、大きな木の陰で為朝が仮眠していると、大蛇が現れて、山風がそれを退治して主人を守ります。が、山風も傷ついて死に、為朝は忠義な山風をねんごろに弔ってやりました。またある日、寺の五重塔に逃げた猿を追い、白縫姫がやってきました。姫は寺の住職から、猿を捕らえるのに猿を傷つけ血を流させてはいけないと言われていました。為朝が猿に矢を放ち、その勢いだけで猿を地に落とすと、姫は喜んで、殿様である父阿曾平四郎に爲朝を紹介します。これが縁で、為朝は白縫姫と結婚しました。

その後、為朝は阿曾の軍勢を連れて、九州各地の悪者を平らげました。荒武者が為朝を襲ってあわやのときがありましたが、野風が敵に噛み付き、主人を助ける一幕もありました。為朝は大宰府に城を築き、義父阿曾平四郎を呼び、白縫姫と幸せに暮らし始めました。が、父の為義から京都へ呼び戻されます。白縫姫を残して京都へ行くと、保元の乱が始まっていて、為朝は父と出陣しますが、為朝の進言は公家の藤原頼長に反対され、戦は負け戦になってしまい、父為義も戦死してしまいました。負け戦でしたが、為朝の放った矢が、敵の大将伊藤六の胸を射抜き、もう一人の大将伊藤五の鎧の袖に突き立ったときには、敵が恐れをなして退却したという場面もありました。

その後為朝は病に倒れて、敵方につかまり、伊豆の大島へ流されますが、そこでも荒れ牛の角を握って押さえ込むなど、その怪力が島民の尊敬の的になりました。そうした噂に敵方は不安を抱いて、多くの船で攻めてきました。その敵船に、為朝が強弓で矢を放つ場面で、絵本の最終ページは結ばれます。「矢ハ　フネニアタッテ　ミルマニ　フネハ　シズンデシマイマシタ。為朝一ポンノ矢ニ　フルヘアガッタテキハ　一イクサモシナイデ　ニゲテイキマシタ」。絵本巻末には、テキストを書いた北村壽夫が、以上の後日談を、「為朝と白縫姫」という題で書いています。

以上で 6 冊の＜武人伝説物＞を取り上げてみました。それらに挿絵を描いた画家は二人、米内穂豊（『大江山』『金太郎』『弁慶と義經』『源為朝』）と、近藤紫雲（『牛若丸』『静御前』）でした。二人のどちらの絵も、奈良絵本や絵巻などの大和絵の流れを汲んだ画風で、明治以降のいわゆる歴史画、武者絵、合戦絵の系譜に属して、有職故実、人物、歴史などの考証と研究に基づく日本画です。同時代の日本画壇では、安田靫彦（ユキヒコ）、前田青邨（セイソン）、小林古径（コケイ）などが活躍していましたので、穂豊（スイホウ）も紫雲（シウン）も、それらに倣ってか、華麗な色彩による浪漫的な作風でした。どちらかと言うと、私は紫雲の方が好みです。二人とも、人物の個性を描き分けるよりは、情景や場の雰囲気を劇的に表現するところに力点が置かれた絵で、紫雲の方が美人画系統の絵師と言ってよいでしょう。穂豊は明治 26 年～昭和 45 年の人で、岩手県の出身、と分かっていますが、紫雲は生没年も出身も不明です。わずかに、昭和 8 年に博文館から『培養実験　大輪咲朝顔』という日本画図の入った著書があるのが知られています。

それにしても、「講談社の絵本」が出回っていた昭和10年代戦中期は、思えばテレビはおろか、映画ですらモノクロームだった時代です。小学校で映画館へ宮沢賢治の『風の又三郎』映画を見に連れていってもらったときの強い思い出が、私にはあります。それも今は懐かしい白黒映画でした。そんな時代の、講談社の目の覚めるような華麗な色彩の絵本は、今の人が想像する以上に鮮烈なインパクトを持つビジュアル・メディアでした。カラー映画が見られるようになったのは戦後です。それも初めはテクニカラー総天然色という謳い文句で、どぎつい色彩の映画でしたが、戦中期に育った人間にとっては、それがまた幻惑的でした。そんな経験をもつ私にとって、改めて今、戦中期の総カラー印刷の絵本「講談社の絵本」が当時、いかに魅力的な絵本であったかを思い出しています。

講談社の絵本『大江山』は、いわゆる「御伽草子」や「奈良絵本」にある「酒呑童子」「羅生門」を元にした話でしたが、『鉢かつぎ姫』『蛤姫』『一寸法師』『浦島太郎』も「御伽草子」から出ています。岩波文庫『御伽草子』（市古貞次校注）の解説を見ると、「平安時代の物語文学は…公家勢力の衰退と共に衰えて行き、南北朝時代にはほとんど姿を消した。その後を承けて、物語文学よりも一層広い範囲の読者をかちえたのが短編の物語草子で…室町時代には写本で行われ、絵巻や奈良絵本も少なく」ありませんでしたが、「江戸時代に入って、それらの中の何篇かが絵入板本として板行され、世に広まったが、ほかに書肆が二十三篇を集めて、同じ体裁で＜御伽文庫＞または＜御伽草紙＞（御伽草子）と名づけて出板した叢書があり…岩波文庫に収めたものがそれで、…（それら）二十三篇について書肆が記すところによると、＜古来のおもしろい草子の集成＞であり＜甚だめでたい草子＞で、女子の身を治める便りとなり、読んで有益なものであった。…このように啓蒙期の幅広い読者に提供された読み物であったから、前代の種々の文芸・説話から材を得て居り、内容も種々雑多で」した、と記されています。内容・分類では、①公家物、②宗教物（僧侶物）、③武家物、④庶民物、⑤外国物、⑥異類物と分けて、「鉢かつぎ姫」は公家物、「一寸法師」は庶民物、「蛤姫」は外国物、「浦島太郎」は異類物とされているので、順にそれらを見ていきましょう。

●『鉢かつぎ姫と孝子萬吉』（昭和13（1938）年12月1日刊、Y17-N03-H1011）

「鉢かつぎ姫」は、絵本のタイトルでは『鉢かつぎ姫と孝子萬吉』と2話が挙げられていますが、「鉢かつぎ姫」は、千葉省三が文、広川操一が絵を担当しています。ストーリーをまず追ってみましょう。河内の国の金持ち夫婦が、子がなくて観音さまに祈願し、女児を恵まれます。夫婦は「＜姫ヨ姫ヨ＞ト　ダイジニ　ソダテ、姫ハ　ハナノツボミガフクラムヤウニ　ダンダンキレイニ　カ

シコクナッテ　ウタヤ　オコトモ　メキメキ　ジャウズニナリマ」す。しかし、「姫ガ十三ニナッタトキ」母が病に倒れて、亡くなります。亡くなる前に「姫ヲヨンデ　ナミダヲコボシナガラ　テバコヲ姫ノアタマニノセ　ソノ上カラ大キナ木鉢ヲ　カブセマシタ。ソシテ＜コレハ　神サマノ　オイヒツケデス。アトデキット　ワカルトキガアリマス＞ト」言います。鉢はすっぽり頭にはまって取れません。そんなみっともない姿を、世間の人は笑い、さげすむので、姫は川に身を投じますが、鉢が浮いて沈みません。船頭に引き上げられて、姫はまたあてどなく歩いていると、さる殿様が気の毒に思い、自分のところへ引き取り、風呂番をさせます。すると、殿様の末息子＜宰相＞が、姫の気立てのよさに好意をもつので、奥方は姫を追い出そうとしますが、宰相が反対するので、乳母と相談して、兄たちの嫁と＜嫁比べ＞をさせます。姫は「ワタクシサヘ　ヰナケレバ　コンナサワギニ　ナラナイデスカラ」と旅支度をして出ます。「宰相ガ姫ニツイテカドサキマデオクッテデルト姫ハ　イツモ　シンジンシテヰル神サマニ　オイノリシマシタ。宰相モ　テヲアハセテ　ドウゾカハイサウナ　姫ノミヲ　オマモリクダサイト　オイノリシマシタ」「ソノトキ　フシギナコトガ　オコリマシタ。姫ノアタマノ鉢ガ　ヒトリデニヌケオチテ　マブシイホド　キレイナ姫ノカホガ　ポッカリト　アラハレマシタ。ソレバカリデハ　アリマセン。鉢ノ中カラ　テバコガ　コロゲデマシタガ　ソノ中ニハ　リッパナキモノヤイロイロナタカラモノガ　ギッシリツマッテヰマシタ」。＜嫁比べ＞で兄嫁たちは、「ウツクシサデハ　マカサレタノデ」、姫に歌を詠ませたり、琴を弾かせたりしていじめますが、どれも姫が上手で驚きます。ここで初めて本当の身分を姫は明かして、これに殿様ご夫妻も喜んで、姫は宰相の妻となり、幸せに暮らすことになります。

これを、「御伽草子」での話と比べると、姫の母の死後、父は再婚して、継母に子が生まれ、継母が姫をいじめだして、あしざまな告げ口を夫にします。それを真に受けて、父は姫を家から追い出します。従って、これは＜継子談＞でもありました。また、姫は長谷の観音の申し子だったので、観音の＜霊験談＞としても語られています。絵本では＜継子話＞の方は消されていますが、＜霊験話＞の方は一部残されています。しかし、絵本の話の後日談が、元の話ではあります。すなわち、「さるほどに故郷の継母御前は、慳貪者（ケンドンシヤ）なる故に召し使はるる者も、かなたこなたへ逃げ走り、後には貧しくなり、ひとり持ちたる姫をもとふ人もなし。御ふたりの中も悪しくなりければ、貧しき住居（スマヰ）何かせん、心に残る事もなしとて、父御前はいづくとも知らず、修行に立ち出で給ふ」とあって、父御前は後悔しきりです。「さるほどに父御前長谷の観音へ御参り有りて、＜鉢かづきの姫、いまだうき世にあるならば、いま一度（ヒトタビ）めぐりあはせたび給へ＞と、肝胆をくだき祈り」ます。一方、「宰相殿（も）…御よろこびのために、長谷の観音へ御参り」に来ます。そして長谷の観音堂で、父と姫が再会するのです。父が「これは夢か現か、ひとへに観音の御利生なり」と言えば、宰相殿

も「さては姫君は河内の交野(カタノ)の人にてましますか。さればこそただ人とは思はぬものを」と言って、「御公達(ゴキンダチ)一人と、姫君の父御前とをば、河内国の主(ヌシ)になしまえらせ、末繁昌に住ませ給ふ。さてまた宰相殿は、伊賀国に御所をつくらせ、子孫繁昌に住ませ給ひける。これただ長谷の観音の御利生とぞ聞えける」と結ばれています。このように元は「観音霊験談」の要素がきわめて濃い物語ですが、絵本では子ども読者に分かりやすい再話にしてあります。不思議な、しかし、庶民の願望を、センチメンタルながら満たしてくれる物語として楽しめます。ただ広川操一の挿絵には難があります。上に引用したとおり、姫の頭の鉢が落ちて初めて、「マブシイホド　キレイナ姫ノカホガ　ポッカリト　アラハレマシタ」とあって、語りでは終始、顔が全く隠れていて見えておらず、そのために姫は不幸になるのですから、鉢に隠されて顔が見えないというところが大切なのに、挿絵は最初の表紙も、本文の中も、鉢をかぶり顔がちゃん見えているので、テキストとの齟齬に興をそがれます。ついでながら明治 35（1902）年冨山房から出た「少年世界文学」16 冊の中で、詩人河井酔茗が『御伽草子』から「はちかつぎ姫」（第四編）と後でふれる「はまぐりの草紙」を再話しています。

●『一寸法師』（昭和 12（1937）年 9 月 1 日刊、千葉省三・文／笠松紫浪・絵、 Y17-N03-H946）

この話は今は一般に、京都の清水坂で鬼を退治するところが、よく知られているはずですが、その挿話は「御伽草子」では出てきません。「御伽草子」での話は、「津の国難波の里」の夫婦が「子なきことを悲しみ」、住吉大明神に祈願して子を授かります。が、その子は「せい一寸」で、一寸法師と名づけられます。12、13 になっても丈が伸びず、「つくづくと思いけるは、ただ者にてはあらざれ、ただ化物風情にてこそ候へ。われらいかなる罪の報にて、かやうの者をば、住吉より給はりたるぞや、あさましさよと、みるめもふびんなり。夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めを、何方(イヅカタ)へもやらばやと思ひけると申せば、やがて一寸法師此よし承り、親にもかやうに思はるるも、口惜(クチオ)しき次第かな、何方へも行かばやと思ひ」、自ら針と椀と箸をもらって、都へ行き、三条の宰相殿の屋敷で過ごさせてもらいます。16 歳になると、宰相殿の 13 歳になる姫君を妻にしたいと思って、大切な米粒を姫が食べたと騒ぎたてます。宰相殿は真に受けて怒り、一寸法師を付き添わせて姫を島へ流します。姫の母は（実は継母だったので）これを「さしてとどめ給わず」島へ着くと、鬼が現れ、一寸法師を飲み込みますが、目から飛び出してくるので、鬼は「是は曲者かな。口をふさげば目より出ずる。是はただ者ならず。ただ地獄に乱こそいできたれ。ただ逃げよ」と言って、打出の小槌を捨てて逃げだします。一寸法師は小槌を振って自分の背丈を伸ばし、姫と都へ戻って、内裏に迎えられ、堀河の少将となり、最後は、「住吉の御誓に、末繁昌に栄へ給う。世のめでたき例、これに過ぎたることはよもあらじとぞ申し侍りける」と結ばれます。これは「庶民の求婚談・立身出

世談」で、「小男が上京し女に求婚する話は、（室町時代の）＜小男の草子＞にも描かれているが、本作はいっそう童話味が豊かで、最も知られている御伽噺の一つ」と言われています。

明治 29 年の巌谷小波による日本昔噺の「一寸法師」でも、一寸法師は両親から「こんな妖怪（バケモノ）みたいな小児を下さるとは、明神様もあんまりな方だ」と言われ、追い出され、一人京へ上り、三条の宰相殿の屋敷へ置いてもらいます。そして、屋敷の人たちから可愛がられ、とりわけ宰相のお姫様に気に入られて、「何処へお出でになるにも、此の小僧をお供になさいましたが、或る日…一寸法師をお連れになって、清水の観音様へ、お参詣に」出掛け、と、ここで清水寺が登場します。参詣の帰途、鬼に出くわして、一寸法師が追い払い、鬼の忘れた打出の小槌で背丈を伸ばし、「立派な一人前の男」となると、「宰相殿も、不思議な事に思召して、此事を天子様へ申し上げますと…一寸法師を御所へお召しになり…それからは…体（ナリ）が大きくなったやうに、身分も段々出世しまして後には堀河の少将と呼ばれ、多くの人に敬はれましたとさ。めでたしめでたし」と結ばれています。そこで、講談社の絵本『一寸法師』へ戻ると、両親は一寸法師をたいへん可愛がり、また一寸法師もやがて自から進んで「ミヤコヘイッテ　エライヒトニ　ナリタイト　オモイマス。ドウゾ　オヒマヲクダサイ」と言い、両親は引き止めますが、「アマリネッシンナノデ　トウトウ　ミヤコヘ　イクコトヲ　ショウチ　イタシマシタ」と、上記の両親像とは 180 度違っています。一寸法師自身も自立した覇気ある青年になっています。京都三条の大臣の家でも、春姫に気に入られて、「姫ノオソバデゴヨウヲスルコトニ」なって、ある日お供して清水の観音さまへ参るわけです。その後の顛末は、小波の再話のとおりですが、千葉省三は話の結びを次のようにしています。「ノゾミノトホリ　シュッセシタ　一寸法師ハ　サッソク　難波ノサトヘ　オ父サマト　オ母サマヲ　オムカヘニ　マヰリマシタ」そして、「一寸法師ハ…春姫トイッショニ　アタラシクツクッタ　ゴテンヘ　オ父サマト　オ母サマヲ　オムカヘシマシタ。ソシテ　ミンナソロッテ　イツマデモ　イツマデモ　ナカヨクシアワセニ　クラシマシタ。メデタシ　メデタシ」と。実は、清水の観音さまへお参りしたときにも、一寸法師は「観音サマニ　テヲアハセテ　難波ノサトノ　オ父サマヤ　オ母サマガ　ドウゾ　ゴブジデ　ヰルヤウニト　オイノリシ」ていました。親思いの孝行息子ということが、強調されています。（子どものときにも、「イッショウケンメイ　オ父サマヤ　オ母サマノ　オテツダヒヲイタシマス」と書かれて、林で木の粗朶を集めている父を手伝う絵が描かれていました。）強調という点では、物語の冒頭でも、「ムカシ…難波ノサトニ　ナカノヨイ　フウフガ　スンデヰマシタ」と、夫婦の「仲の良さ」が謳われています。親子のむつまじさも、一寸法師の旅立ちの場面で、「一寸法師ハ　オ父サマト　オ母サマニ　ミオクラレテ　難波ノハマベカラ　コギダシマシタ。＜オ父サマ　イッテマヰリマス。オ母サマ　ゴキゲンヨウ＞一寸法師ハ　ミズギワニタッテミオクッテヰル　フタリ

ニナンドモ　コエヲカケマシタ」。「御伽草子」や小波で描かれている邪険な親の姿とは対照的な親子像が描かれています。

講談社の絵本で同じく千葉省三がテキストを書いた『桃太郎』に関して、西田良子氏が指摘していること（『日本の絵本史』ミネルヴァ書房）が参考になります。以上のような、仲の良い夫婦、むつまじい親子、孝行な子ども、といった強調を、「教育勅語」の思想による付け加えである、と述べています。確かにそのとおりでしょう。しかし、「教育勅語」の「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ」というくだりの思想が間違いであると、(戦後の家庭崩壊の現状を見るにつけて) 言えないところに、今日の問題があります。西田氏は、昔話である『桃太郎』のテキストを、(第四期（1933～38 年）の）国定国語教科書の「モモタラウ」と比較して、千葉省三のテキストが「きわめて口調がよく、描写も細かく、語りの文章としては教科書の文章より優っている。これは頁数の違いによるものである。頁数に一定の制限のある教科書と違って、＜一冊一話＞で五十六ページ、見開き一杯に描かれた＜講談社の絵本＞は、描写も細かく、絵数も多く、当時の子どもにとって魅力のある絵本だったと思われる。と同時に、＜講談社の絵本＞の文章は時に饒舌になりすぎたり、社会状況に迎合して本来＜桃太郎＞の話にはない余計な挿話が付加されたりしている点も見逃せない」と、長所短所を指摘しておられて、これは正鵠を射た批評と言えましょう。講談社の絵本は「当時の子ども」だった私には確かに「魅力のある絵本」でした。時局に「迎合して…余計な…付加」のあることも事実ですが、時には、その＜饒舌＞が物語にふくらみを与えて、楽しませてくれたことも、また事実でした。

『一寸法師』では、淀川をお椀の舟で都へ上るくだりに、3 見開きが当てられています。「ヒガクレルト　ミズギハノ　アシノナカニ」舟を漕ぎ入れて休む場面では、葦の茂みのむこうに満月がかかっています。そして、夕立で親切な舟頭さんに助けられ、都の近くまで送ってもらう 2 見開きでは、夕立と、夕立が去り虹の立つ景が続きます。都へ着くと、一寸法師がしばし休む五条の橋の欄干越しに、東山と清水寺が遠望されています。いずれも詩情ただよう、なごやかな景です。また、三条の大臣の屋敷へ行く道すがら見る京の街では、京扇子や弓矢を商う店が並んで、侍や僧侶、大原女やお駕籠など往来しています。春姫たちが貝合わせに興じている場面も出てきます。どれも物語の進行に彩りを添え、女性たちの着物の柄も色も様々に、笠松紫浪の絵筆の鮮やかさが大いに楽しめます。

●『蛤姫と鼠の嫁入』（昭和 15（1940）年 7 月 1 日刊　Y17-N03-H954）

絵本のタイトルには『蛤姫と鼠の嫁入』と 2 話が挙げられていますが、「蛤姫」は千葉省三が文を、

村上三千穂が絵をかいています。「御伽草子」の「蛤の草紙」をほぼ忠実に再話したものです。天竺(テンジク)魔訶陀(マカダ)国の＜しじら＞という孝行息子が、孝行の徳を観音の浄土から報われるという、天竺すなわち古インドの話なので、＜外国物＞に分類されています。＜しじら＞は毎日、母のために漁に出ていますが、ある日、魚でなく蛤がとれます。それを舟に入れると、にわかに大きくなり、中から姫が出てきます。しじらは姫の言うままに家へ連れ帰って、二人は夫婦となります。近隣の人たちが「しじらの所にこそ、不思議の降(フ)り人わたり候。いざや参り拝まん」と言って、米・麻糸をもってやってきます。その麻糸で姫は立派な織物を作り、しじらに町で「金銭三千貫に御売り候へ」と言います。が、値段が高すぎて売れません、帰ろうとすると、不思議な老人と出会い、買ってくれて、立派な屋敷へも招待してくれます。帰ろうとすると、老人が「是ぞ親孝行のしるしよ」と言って、自らは雲を呼び南の天へ消えてしまいます。家へ戻ると、女房が、実は自分も「観音の浄土より、御使いとして参り候…これもひとへに親孝行の徳により、かくの如くあはれみ給う事まぎれなし、さらば」と言って、やはり白雲に乗って南の空へ消えていきます。「草子」の結びのことばは、「親孝行の候はば、かくの如くに富み栄へて、現当(ゲンタウ)二世の願、たちどころにかなふべし…この草紙を人にも御読み聞かせあるべし、御読み聞かせあるべし」とあり、まさにそのとおりに、ねんごろに絵本に再話されています。ただし、＜しじら＞と姫の結婚話は省かれていますが。岩波文庫版の解説では「孝子しじらの孝行成功談。別名を＜蛤機織姫＞というように、蛤から美女が現れ、妻となり、幸いをもたらすので、異類（魚貝類）の怪婚談（神婚説話）でもある」と解説されてはいますが…。

●『浦島太郎』(昭和 12 (1935) 年 5 月 1 日刊　徳永寿美子・文／笠松紫浪・絵、 Y17-N03-H1007)

『浦島太郎』は、絵本が語っているとおりに私は覚えているので、特に目新しく思いませんでしたが、「御伽草子」での話と比べると、幾つか問題を感じます。一つは＜伝説＞として語られていないことです。「御伽草子」では「昔丹後国に、浦島というもの侍りしに、その子に浦島太郎と申して、年の齢二十四五の男有りけり。…ゑしまが磯といふ處にて、亀を一つ釣り上げける」と始まり、最後は、玉手箱を開けて「二十四五の齢も、忽ちに変りはて…鶴になりて、虚空に飛び上り…其後浦島太郎は、丹後国に浦島の明神と顕れ、衆生済度し給へり。亀も同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり」と、明かに＜伝説＞として語られています。現に京都府与謝郡伊根町には宇良神社（浦嶋神社）があり、浦島太郎にまつわる伝承（や絵巻や玉手箱など）が残されています。＜浦島太郎＞という名も＜水江浦嶋子＞すなわち＜水の江の浦（に住む）嶋子(シマコ)[＞から出ている、と言われています。前後しますが、「御伽草子」では、浦島太郎が海で亀を釣り上げ、これを海へ戻して命を救い、その翌日海で「美しき女房只ひとり」が乗った舟と出会い、その女房

の頼みで海上を送ると、龍宮城へ着き、龍宮滞在が始まります。そして、女房は「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや遥かの波路を、はるばると送らせ給ふ事、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契をもなし給ひて、同じ所に明し暮し候はんや」と言われ、夫婦となって 3 年を過ごします。そして、故郷の両親のもとへ浦島が帰るときに、女房は「今は何をか包みさぶらふべき。自らは、この龍宮城の亀にて候が、ゑしまが磯にて、御身に命を助けられ参らせて候、その御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなり参らして候」と打ち明けます。岩波文庫の解説で、この話は「男と亀の怪婚談」で、「日本書紀、万葉集、丹後国風土記逸文などに見え、平安時代にも受けつがれたが、本作は助けた亀というふうに報恩談を加味している。太郎という名も室町時代に入ってはじめて見えるものである。なお終りの太郎が浦島明神、亀も神となって現れるというのは、本地物の性質も帯びている」と解説されていますが、先の『蛤姫』と同様に、ここでも講談社の絵本では＜結婚談＞が省かれています。また、絵本では亀は、浦島を龍宮へ案内し、故郷へ送り帰す役で、龍宮での浦島の接待は、龍宮の主（アルジ）乙姫がしています。

巌谷小波の『日本昔噺』の「浦島太郎」では、「むかしむかし、丹後の国水の江という処に、浦島太郎と云ふ、一人の漁師が在りましたとさ」、と＜伝説＞として語られています。そして、子どもらにいじめられている亀を救い、翌日その亀に呼ばれて、助けてもらったお礼に龍宮城へ、亀の背に乗って行き、そこで 2、3 日滞在したつもりで、帰ってみると、なんと 700 年もの歳月が過ぎていた、と講談社版に近い内容です。小波の話で、龍宮城の「殊に中にも不思議なのは、そのお庭の景色で。春も夏も秋も冬も、一時に目前に現はれて居ります。まず東の方を見ますと、梅や桜が咲き乱れて、鶯が鳴いたり、蝶々が飛んだりして居ります。南の方を見ますと、木葉が青々と茂って、蝉や蜩（ヒグラシ）が鳴いて居ります。西の方を見ますと、紅葉や菊の真盛り。又北の方を見ますと、此処には雪が真白に積って、お池には氷が張って居ります」というくだりが、講談社の絵本ではもっとそっけなく、東は花の庭、南は果物の庭と 2 見開きページにすぎません。「御伽草子」では、この部分が語りの高揚するところで、＜四季づくし＞の名文です。すなわち――

まず東の戸をあけて見けれは、春の景色と覚えて、梅（ムメ）や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音（ネ）も軒近く、いずれの木末（コズエ）も花なれや。

南面（ミナミオモテ）を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春をへだつる垣穂（カキホ）には、卯の花や、まづ咲きぬらん、池の蓮（ハチス）は露かけて、汀（ミギハ）涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蝉の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏とや知らせけり。

西は秋とうち見えて、四方(ヨモ)の梢も紅葉(モミジ)して、籬(マセ)の内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩(マハギ)が露を分けわけて、声ものすごき鹿の音(ネ)に、秋とのみこそ知られけれ。さて又北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方(ヨモ)の木末(コズエ)も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙(シロタヘ)の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈(スミガマ)の煙(ケブリ)にしるき賤(シズ)がわざ、冬としらする景色(ケシキ)哉(カナ)。

以上、講談社絵本で『御伽草子』とつながるものを取り上げて、考察してみました。以下の 3 冊は、「御伽草子」がらみではありませんが、古来の日本もので、ストーリーが楽しめるもので、私の推奨したい絵本です。

●『かぐや姫 : 竹取物語』(昭和 14 年 3 月 5 日刊　西条八十・文／織田觀潮・絵、Y17-N03-H1006)

「竹取物語」は、つとに『源氏物語』で「物語の出で来はじめの祖(オヤ)」と呼ばれていました、日本最古（平安前期、10 世紀初頭）の物語文学です。『かぐや姫 : 竹取物語』は、それを子ども向きに再話したもので、内容に多少の割愛はありますが、ほぼ忠実に原作を伝えています。話の筋はすでにご承知と思いますが、ざっと追ってみましょう。

竹とり（職人）の翁が、竹の節から小さな女児を見つけて、育てます。女児は僅か 3 か月で絶世の美姫となり、かぐや姫と名づけられます。翁はその後、竹の中からお金を得て金持ちになり、かぐや姫には求婚者が多数現れます。しかし、姫は「深き志を知らではあひがたし（結婚できない）」と、すべて断わりますが、なおしつこい公家 5 人に、難題を突きつけます。車持皇子(クラモチノミコ)には蓬莱の玉の枝を、大伴御行(オオトモノミユキ)には龍の首の珠を、石上麻呂(イソノカミマロ)には燕の子安貝を、（講談社の絵本では触れられていませんが、阿倍右大臣には火鼠の裘(カハコロモ)を、石作皇子(イシツクリノミコ)には仏の御石の鉢を）それぞれ持参せよ、という難題でした。もちろん 5 人とも不首尾に終わりますが、噂は帝(ミカド)の耳に入ります。絵本では、帝は殿様とされて、「アルヒ　トノサマハ　カリニデタ　カヘリミチニ　カグヤ姫ノウチヘ　オヨリニナリマシタ。ソシテ　ヒョウバンヨリモ　ナホウツクシイ　姫ヲミテ　ゴテンヘ　ツレテイキタイト　オッシャイマシタ。ケレドモ　姫ハ　オヂイサン　オバアサント　オワカレスルノガ　ツライトイッテ　ドウシテモ　キキマセンデシタ」。かぐや姫は「ヒロハレテカラ」4 年目、春頃から月を見ては悲しい顔をし始めるので、わけを聞くと、「ワタクシハ　アノツキノミヤコニ　ウマレタテンニョデス。ワケガアッテ　シバラク　ニンゲンノスム　コノセカイニ　キテヰタノデスガ　コンドの十五ヤニハ　オムカヘガキテドウシテモ　ツキノクニヘ　カヘラネバナリマセン」と言います。お爺さんは驚いて、殿様に相談します。殿様は姫を護るために、大勢の家来を送ってよこし、十五夜の晩の警備をさせます。しかし、天のお使いたちが来ると、警護の侍たちは手足がきかなく

なり、口もきけなくなってしまいます。かぐや姫は羽衣を着せられ、迎えの車に乗せられて、お爺さんとお婆さんに、着ていた着物を「ワタクシトオモッテ　クダサイ」と言い残し、「オセワニナッタ　トノサマニモ　オワカレノテガミヲ　カキマシタ。ソレヲ　オジイサンニ　アヅケ」て、「アヲイソラノナカニミエナクナッテ　シマヒマシタ」。ここで絵本は終っていますが、元の話では、この先があって、帝はもらった手紙と、一緒にもらった不死の薬を、駿河国の日本で一番高い山で焼くように命じます。そのため、不尽（富士）の山からは、今もなお煙が立ちのぼっています、という地名伝説で結ばれます。

この物語で特に滑稽なところは、車持皇子が鍛冶職人に 3 年がかりで偽の「蓬莱の玉の枝」を作らせて、かぐや姫の元へ持っていき、蓬莱へ行った嘘話をしていると、職人たちが手間賃を要求しにきて、嘘がばれてしまうくだり。また、大伴御行が龍の首の珠を取りに、大海原へ船出して、大嵐に遭い、命からがら舞い戻り、もう懲りごりとあきらめるくだり。そして、石上麻呂が燕の子安貝を取ろうと、やぐらを立て燕の巣を狙いますが、転落してしまい、せっかく巣からつかみ取ったのも燕の糞にすぎなかったというくだり。いずれも美女に狂奔する求婚貴族たちが戯画化されていて、その軽快な笑いは現代人の目にも新鮮です。

織田觀潮による日本画は、ストーリー展開でハイライトの情景を情趣豊かに描き出しています。挿絵の場面の割り振り数をみると、翁がかぐや姫をみつけて慈しみ育てるくだりが 5 場面、公家たちが戯画化されるくだりが 13 場面、かぐや姫が翁のもとから月へ帰るくだりが 10 場面、合計 28 場面で構成されています。これを、翁とかぐや姫のかかわるところが 5＋10＝15 場面、美姫に群がる軽薄男子の箇所が 13 場面とみると、後者の戯画化で笑いの部分が全体の半分に近く、翁夫婦とかぐや姫と間の、親子相互の愛と別れの悲しみ、すなわち人間愛の喜びと悲しみの箇所と、ほぼ折半されています。国文学者南波浩氏は『竹取物語』が「現実性と伝奇性、現実と理想、醜い世界と美しい世界、＜をこ＞の世界と＜あはれ＞の世界、滅びゆく者と永遠なる者、――これらの対照的な要素が巧みに配置されて、構成の妙を尽くした」作品である（『新潮・日本文学小辞典』）と評しています。再話者西条八十による、絵本の表紙裏ページの前書きは、こうした観点からみると、年少者向けに極めて適切な作品解説と言えるでしょう、すなわち――

『竹取物語』は、いまから千年もまへに書かれた、わが国で一ばん古い小説であります。作者は誰だかわかりませんが、月の国の天女が下界におりてきて、竹の幹の中に住んでゐる、それが年寄り夫婦のなさけでそだてられてゐるうちに、中秋名月の夜に、またもとの月の国へかへってゆくといふ、まことに綺麗な、想像力のゆたかな作品であります。

この物語のなかには、拾い子をやさしく育てた年寄夫婦が、その報いでしあわせになることや、どんなにうまくうそをついても、おしまひにはわかることや、身のほどを知らず、無鉄砲なことをする人には、わざはひのくることや、いろいろな教訓がふくまれてゐます。

なほこの宇宙には、人間のちひさな智慧や力ではかり知れぬ、大きな力のあることを教へ、幼い人たちに、ゆたかな想像力をあたへます。

西条八十は、この『竹取物語　かぐや姫』のほかにも、『静御前』でもテキストを書いていますが、その再話ぶりは、文章ともどもさすがに見事であると思います。

●『安寿姫と厨子王丸』（昭和 14（1939）年 1 月 5 日刊　千葉省三・文／須藤重[シゲル]・絵、Y17-N03-H1067）

これは森鴎外が小説『山椒大夫』（大正４年１月）で語った物語で、説経節、古浄瑠璃の「さんせう太夫」によったものです。

＜説経節＞を『広辞苑』でひくと「中世末から近世に行われた語り物の一。仏教の説経から発し、和讃・講式・平曲などの影響をも受ける。簓（ササラ）を用い、大道芸・門付芸として発達。門説経（カドセッキョウ）・歌説経などの形態もあった。やがて胡弓・三味線をも採り入れ、操り人形芝居とも提携して興業化。全盛期は万治・寛文の頃（17 世紀半ば）で、宝永・正徳頃から義太夫節に圧倒されて衰微。説経浄瑠璃とも称。→五説経」とあり、＜五説経＞をひくと「説経節の代表的な五つの曲目。＜山椒大夫＞＜苅萱（カルカヤ）＞＜信田妻（シノダヅマ）＞＜梅若＞＜梵天国＞（または＜愛護の若＞）。また、「山椒大夫」「苅萱」「俊徳丸」「小栗判官」「梵天国」の五つ」とあります。

「さんせう太夫」の粗筋を絵本のそれと重ねながら見てみましょう。陸奥の判官岩木正氏（マサウジ）は讒言のため筑紫の安楽寺へ流されました。残された妻と二人の子、姉安寿姫と弟厨子王は、父を訪ねるため筑紫へ向う途中で、越後直江の浦で人買いに捕まり、母は佐渡へ、二人の子は丹後由良の「オニノヤウナ　オカネモチ」山椒大夫に売られ、姉は潮汲み、弟は柴刈りの労働を強いられます。あるとき二人が逃亡を密談していたのを聴きつけられて、山椒太夫の息子三郎から厳しい折かんを受けます。受けた傷に、二人が持っていた守本尊を当てると、たちどころに癒えました。しかし、姉はその後、守本尊を弟に持たせて、父と母を救うために、一人で脱出させ、自分は入水して果てます。（絵本では、姉は山椒太夫のところに働き続けて、後に弟と再会を果たしますが）。厨子王は（今の舞鶴市中山の）　国分寺で、住職にかくまってもらい、都まで送ってもらいます。都では、守本尊の導きで、関白藤原師実に出会い、その庇護を受けました。父正氏の死も、そこで知らされます。

厨子王はその後、正道と名を改めて、丹後の国守に任ぜられます。任地では、非道な山椒太夫父子を捕らえて罰し、領内に人買い禁止令を出します。厨子王丸は（絵本では、姉安寿姫と一緒に）佐渡へ渡って、母を探して、瞽女（ゴゼ）となっている母を探し当てます。「オ母サマハ　二人子供ニワカレテカナシサノアマリ　トウトウ　目ヲ　ナキツブシテ　シマッテヰタノデ」したが、守本尊を目に当てると、たちどころに回復して、それからは母子ともに丹後の国で幸せに暮らすことになります。（ここでは、守本尊のご利益が終始語られているので、本地物の要素を持つ話と言えます。）

絵本の須藤重による挿絵は、日本画と童画を折衷した感じで、人物の表情、風貌を善悪対照的に描き分けており、子ども読者に作品のエモーションがつかみやすく工夫されています。内表紙に柴刈りと潮汲みの道具が描かれているのも、話の内容にふさわしいカットと言えるでしょう。子どものときにこの絵本に接して、長じて鴎外の『山椒太夫』を読めば、きっとよい読書体験となることでしょう。

●『菅原道真　天神様』(昭和 14（1939）年 4 月 1 日刊、前田晃・文／荻生天泉・絵、Y3-N03-H148)

講談社の絵本 203 冊には、人物伝（偉人伝）が 40 冊余入っています。「ヒットラー」以外はすべて日本歴史の中から、戦中色を背景に人選がなされていて、「一休さん」「野口英世」相撲の「雷電」などを除けば、ほとんどが武将や天下人です。が、＜天神さま＞道真だけは、唯一＜学者・文人＞からの選と言えるようです。

大岡信が『詩人・菅原道真』（岩波現代文庫）　で、「天神さまとしての道真は、受験生には受験生の…文楽や歌舞伎の観客には観客の」それぞれの天神イメージがあって、「その意味では、菅原道真は現代にも相変わらず生きています。けれども、言ってみればまさにそのために、菅原道真の最も本質的な側面は忘れられているという皮肉な事態になりました。すなわち、平安朝漢詩人のうち疑いもなく最高の詩人であった道真の、詩人としてのポートレートは」影が薄くなっている、と指摘されており、まさにそのとおりでしょう。

前田晃の文による『菅原道真：天神様』は、学者として、詩人として、道真像を子ども読者に向けて描いたものとして、戦中期当時としてはリーズナブルな伝記と言ってよく、また、戦中期講談社の絵本の中でも、ユニークな 1 冊と言えます。そこでは、道真が幼少から利発で 3 歳で文字を覚え、5 歳で赤い梅の花を見て「ウツクシヤ　ベニノイロナル　ウメノハナ　ワコガカホニモ　ツケタクゾアル」とうたい、これが「天子サマ」の耳に届いて、御殿に呼ばれ激励を受け、帰途応天門の弘法大師による扁額を見て、家に着くと「応天門」という文字を見事に書いた、などの逸話から、語り始められています。道真はその後、著名な学者都良香（ミヤコノヨシカ）の下で学び、文章（モンジョウ）博士となって、「詩

ヲツクッテモ　ブンヲカイテモ　道真ニカナフモノハ　ナクナリマシタ。クラキモ　ヤクメモ　ズンズン　ススンデ　道真ノ　ナ　ハマスマス　タカク　ナリ」、讃岐守を務めた後に、55 歳で「右大臣トイフ　オモイヤクニノボリマシタ」その翌年の 9 月 10 日、清涼殿の菊の宴で、見事な歌をうたって、＜天子サマ＞から「オメシモノヲヒトカサネ　タマハリマシタ」しかし、あまりに＜天子サマ＞の信任が篤いために、左大臣藤原時平が嫉妬して、彼の讒言で道真は突如大宰権師（ダザイノゴンノソチ）に降格され（子も別々に都を追われ）、九州筑前へ旅立ちます。ここで「コチフカバ　ニホヒヲコセヨ　ウメノハナ　アルジナシトテ　ハルヲワスルナ」が紹介されます。そして、「播磨ノクニノ　明石ニツクト　マヘカラ　道真ヲ　ヨク　シッテキタ　ソコノヤクニンガデムカヘテ　道真ノ　フシアハセヲ　ナゲキマシタ。スルト道真ハ＜イヤ　サカヘタリ　オトロヘタリスルノガ　コノヨノナカノツネダ＞トイッテ　カヘッテ　ヤクニンヲ　サトシマシタ」とあり、これは「駅長莫驚時変改／一栄一落是春秋」（駅長驚くなかれ時の変改／一栄一落是れ春秋）とうたった歌への言及でしょう。次に、玄海灘を行く船中で「道真ハ　ヒロビロトシタ　ナミノウヘノツキヲ　ナガメナガラ　ミヤコニノコシテキタ　ヒトビトノコトヲ　カンガヘテ　ウタヲヨンダリ　詩ニツクッタリシテ　ココロヲナグサメマシタ」とあるくだりは、多分「ながれゆくわれはみくづとなりはてぬ、君しがらみとなりてとどめよ」「ゆふされば野にも山にもたつけぶり、なげきよりこそもえまさりけれ」「うみならずたたへる水のそこまでにきよきこころは月ぞてらさむ」などの歌を念頭においたくだりでしょう。大宰府で 9 月 10 日を迎えると「道真ハ　トホイミヤコノコトヲ　オモヒウカベナガラ　キョネンノコンヤ　清涼殿デ　天子サマカラタマハッタ　オメシモノヲオシイタダキ　ゴオンノアリガタサヲオモヒダシテオリマス、トイフ　イミノ詩ヲ　ツクリマシタ」これは有名な「去年今夜侍清涼／秋思詩篇獨断腸」（去年の今夜清涼に侍す／秋思の詩篇獨り断腸）と「恩賜御衣在此／捧持毎日拝餘香」（恩賜の御衣今此に在り／捧持して毎日餘香を拝す）と詠まれた歌への言及ですね。私などの年齢の者は中学校の漢文で暗記させられた歌でした。

このように、この官公伝は詩人菅原道真に焦点を当てていますが、当時の例にもれず「『大鏡』第二巻のさして長くもない＜左大臣時平＞伝に描かれている道真の像がもとになっている」（大岡信『詩人・菅原道真』より）道真像ではありました。そういう一面的な道真像を払拭して、もっと人間臭い、真の詩人として、現代の私たちが共感できる＜菅原道真＞を示してくれたのが、大岡信の＜詩人・菅原道真論＞でした。大宰府で失意の日々を送っていた道真の素顔を覗かせる「読家書」の漢詩を大岡信の現代語訳で引用しましょう（家書とは「家族（妻）からの手紙」です）。

消息なき寂寥の三月余りがすぎて／ついに順風が吹き　封書が一通／読めば　西門に植えた樹は

人に抜き去られ／北の庭の空地には　新たに人が住みこんだ／紙に生薑（ショウガ）を包んで薬と表に書いてある／竹籠に昆布をつめて　精進の食べ物と記してある／妻子の飢えと寒さの苦しみには　一言も触れていない／このためかえって憂愁は増し　私は懊悩する（「消息寂寞三月餘／便風吹著一封書／西門樹被人移去／北地園教客寄居／紙裏生薑稱藥種／竹籠昆布記斎儲／不言妻子飢寒苦／爲是還愁懊悩余」）

大岡信は、この詩と、先の「恩賜の御衣今此に在り…」という「九月十日」の詩と並べて「＜九月十日＞は、至誠純情の人道真の忠誠心の発露の名作として、古くから、とくに近代以後の教育の世界では第二次大戦終結まで、とりわけ重んじられてきた詩です。侍臣たちに囲まれて恩賜の御衣を拝する道真公の図は『北野天神縁起絵巻』を通じて広く人々の脳裏に住みついたものでした。この図では、道真はもちろんのこと、彼をとり囲む貴族たちもみな、宮中にあるのと同様の礼装に威儀を正してうやうやしく侍っています。道真の居室も立派な邸宅です。天神様の縁起絵巻ですから、これはこれでいいのでしょうが、＜九月十日＞という詩の内実とはあまり関係がない。忠誠心の発露をこの詩に読みとることはよろしいとしても、倫理的な価値と詩の価値とは直結するものではないということは、近代以後の日本社会では、十分理解されていない事柄に属します。いずれにせよ、『家書を読む』のような詩のよさについて、従来十分に光があてられて来たとは思えません。実際はそこにこそ、菅原道真の人間像が鮮やかに輝き出でているのです」と論じておられます。今日の私たちは、こうした認識をもちながら、戦中期の絵本『菅原道真：天神様』を回顧的に読み、なお戦中期のこの書のレーゾン・デートル（存在理由）を評価したい、と私は思っています。